研究所だより

第４３８号
２０２２年　１月１２日
発行：土佐清水市教育研究所
ＴＥＬ　８２－３０１５

“ 長き夜の　　遠の睡りの　　皆目醒め
　　波乗り船の　　音の良きかな ”
「なかきよの　とおのねふりの　みなめさめ
　　なみのりふねの　おとのよきかな」

『 初夢の歌 』　室町時代から伝わる回文和歌
注：「たけやぶやけた」のように、逆から読んでも同じ音になる遊び歌

寒中お見舞い申し上げます

穏やかだった正月、松の内もあっという間に過ぎました。各学校では３学期が始まり、子どもたちも教師も新年の決意も新たに、やる気に満ちあふれているのではないでしょうか。

暦の上では５日は「小寒」。この日から「寒の入り」となり、節分までが「寒の内」と呼ばれ、冬の寒さが一番厳しくなる次期の始まりです。小寒は、寒さの次期ではありますが、地中ではセリが生え始めたり、凍った泉の氷が溶け始めたりと、徐々に春へ向けてわずかに温かさが感じられる頃です。

昨年末からは、更に感染力の強いオミクロン株による市中感染が確認され、感染再拡大が懸念されています。オミクロン株に対しても、変わらず基本的な感染対策を徹底することに尽きるようですので、「密を避け、手洗い・うがい、マスクの着用、換気」を心掛けるようにしましょう。

（月刊日本教育１０月号）から

ＧＩＧＡスクール構想　一人一台端末時代の学校づくり

第６回（最終回）　ＢＹＯＤを意識して活用推進

玉置　崇 教授（岐阜聖徳学園大学教育学部）

１．ＢＹＯＤを意識すること

管理職は１人１台端末活用についてはBYODを意識することが大切です。

BYODとは、Bring Your Own Deviceの略です。つまり、GIGAスクール構想の実現に向けて、国や自治体が多大な税金を投じて、１人１台端末を準備しましたが、こうした状況がいつまでも続くとは思われません。数年先には、公費以外での機器整備が必要だと言われています。それを象徴する言葉が、BYODです。

例えば、令和元年６月２１日の閣議では、「規則改革実施計画」の中で「パソコン（タブレット等を含む）１人１台（BYODを含む）をはじめ、あるべき教育基盤をできる限り早期に実現」ということが決められています。

現在配備された１人１台端末が活用されていなければ、どのような事態が発生するかは想像できます。
「端末費用は保護者負担」と発表された途端、厳しい電話やメールが入る学校があるでしょう。
「子どもは、授業で端末を使うことはあまりないと言っている。端末を家に持ち帰って来たこともない。端末は学習に必要がないのではないか。それなのに保護者が購入して持って来いとは何事だ！」

管理職を経験しただけに、こう怒鳴られることがすぐに頭に浮かびます。

こういった苦情が入らないために端末利用を促進するというのは本末転倒ですが、機器が配備された今こそ活用を始めるべきです。端末が整備されてから、数ヶ月経っても充電庫に入れたままの学校があるようで心配です。

２．活用状況の積極的発信

GIGAスクール構想の具現化への取組を積極的に発信している自治体があります。都道府県・市町村教育委員会が、活用方針をはじめ、機器利用の手引き、教職員研修資料、保護者向け説明文書など、他の自治体にも参考になるように、献身的といっても過言でないほど情報を提供しています。もちろん、ネット上で閲覧でき、教職員だけでなく、保護者も簡単に良質な情報を手に入れることができます。

そのような自治体が所管する小中学校を見ると、やはりGIGAに関する多くの取組を発信しています。地域が一体となって、GIGAスクール構想を実現するために協働している様子が思い浮かびます。

一方で教育委員会や小中学校のホームページを見ても、１人１台端末整備がされた状況が皆目わからない組織を目の当たりにします。

ある自治体の議員が、「教育委員会にGIGAの整備について確認すると、うまくいっていますという返答だが、先生たちに直に聞くとそうでもないようで、実際に学校視察させてもらおうと思っている」と言われました。GIGAスクール構想は全国一斉に行われた施策であり、市民の関心も高く、議会で決議した立場から関心を持っておられるのは頷けることです。

学校の積極的な情報発信が望まれていることを感じていただけたでしょうか。貴校のGIGAスクール構想に関連したホームページの記事は、導入後半年で何本あるでしょうか。管理職の目でチェックして見てください。

私が校長になったときに、当時の教育長から言われた「玉置さん、保護者はネットで校長比べをしていることを意識しておきなさい」という言葉は、未だに忘れられません。現在は「校長比べ」ではなく「GIGAスクールの実現化比べ」がネットで始まっています。

子どもたちが端末を活用している写真と簡単な一文を加えた記事を１日１本、ホームページで発信してはどうでしょうか。「本校は端末をよく活用しています」という文章より、子どもたちが嬉々として端末を使っている写真の方が、より多くのことを伝えられます。日々、ホームページに掲載された端末活用写真を見て、安心される保護者や地域の方は多いと思います。

３．実践のバージョンアップを目指す

授業や学校生活において端末活用が日常化してきた学校は、現状に満足することなく、ワンランク上の実践を目指しましょう。

機器配備当初は、まずやってみようという精神で、あらゆることに挑戦された学校も多々あります。半年過ぎた時点で、これまでの実践を振り返り、端末活用がプラスに働いたかどうかを点検してみると良いでしょう。

子どもたち１人１人の書き込みを１画面に集約しても、それを活用することはできていないなど、授業における端末利用の効果を全教員で話し合い確かめます。また、教員の悩みを出し合い、解決策を話し合うことでも、実践のバージョンアップを図ることができます。

＝ 教研・研究協力校関係提出物について ＝

○教研各部会（提出書類）	期　日	○研究協力校（提出書類）	期　日
＊総括教研部会報書	１月２８日（金）	＊研究集録原稿	１月２８日（金）
＊研究集録原稿	１月２８日（金）	＊決算書	２月１６日（水）

＊「決算書」未提出の部会は、処理ができ次第提出をお願いします。